
ジノの彩国建国物語

餅国

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジノの彩国建国物語

【Nコード】

N3179Y

【作者名】

餅国

【あらすじ】

突如として《緑国》は《青国》の軍勢に攻め込まれた。両国の兵力の差は大きく、次々に人の住む集落は落とされていく。《緑国》は劣勢の状態にあった。《緑国》の一兵士であったジノは、その動乱の中でなぜかその身を立てていくことになる。しかし、当の本人は出世することを望んでいるわけではなかった。むしろ嫌がってすらいるようであった。

一話

晴れ渡る秋空の下に広がっているのは、どこまでも無残な光景であった。その集落のそこかしこから、ぶすぶすと黒い煙が上がっている。ほとんどの建物は兵によって火を付けられるか、もしくは打ち壊されていた。今ではまともな建物など一つも残っていない。そしてその周囲には、逃げ遅れたのであろう多くの遺体が残されていた。

遺体の中には、あきらかに斬りつけられたのだと分かる形で倒れている者もいれば、傍目からは無傷のようには見えない者もいた。ただし、その者らも一人の例外なく死んでいる。

なぜなら、略奪が終わって一日が経った今、この周辺に兵の姿はない。彼らの中にも生きていたのなら、とっくに逃げ出していておかしくないのだ。それでもまだそこに留まっているというのは、つまりそういうことだった。

それでも一応、まだ彼らは人としての体裁を整えていた。とはいえ、彼らを埋葬しようとする者はいないから、それも時間の問題ではある。

中には火事に巻き込まれたらしく、体の大部分が焼けて黒く変色している者の姿もあった。彼らに関しては、すでに人としての面影が残っていない。ただただひどい臭気を放っている。もし生きたま焼かれたのだとしたら、彼らは事切れるまでひどく苦しんだことだろう。

それを考えると、この地はまさに焦土と呼ぶに相応しい、この世の地獄のような光景であった。

その男はそんな街並みを憂うような表情で眺めていた。それはまるで自分を責めているような、自分の無力さを悔やんでいるような表情であった。彼はこのような事態を引き起こした責任の一端を担っているのだった。勢いのついた兵の暴走を彼は抑えることが出来なかった。

彼以外の指揮官は、略奪を兵の当然の権利として認めていた。それらを兵に与えても彼らの懐は全く痛まないからだ。むしろ士気向上の手段として最も有効である、と言い切った指揮官もいた。しかし、彼にはどうしてもそのことが受け入れられなかった。人間としての尊厳を全く捨て去っているようにしか思えないからだだった。

そんな彼に後ろから近づき、話しかける人物がいた。彼の直属の副官であった。

「メール様。時間です。そろそろここを出立しませんと」

その言葉に、メールは小さく頷いた。いつまでもここで感傷に浸っているわけにもいかなかった。戦争はまだ続いている。

「兵の様子はどうか？」

「ええ。兵の士気は依然下がっておりません。むしろ高まっているでしょう」

メールの部下は端的に事実だけを告げた。その理由に関しては、はっきりと言わない。彼はメールがなぜここに立って街並みを眺め

ていたか、分かっていた。

「そうか」

メールもただそう答えた。余計な言葉は言わない。副官とは長い付き合いであるので、彼の考えていることは分かっていた。

早くこの戦争を終わらせよう。メールは眺めていた光景に背を向けると、足早に歩き出すのだった。

《青国》が《緑国》に攻め込んでから二週間が過ぎようとしていた。《青国》のそれはまさに電光石火と言っていいような素早い進撃だった。《緑国》はほとんど抵抗らしい抵抗も出来ず、その領土の三分の一を《青国》に食い荒らされている。

勝てないかもしれないぞ、という厭戦の雰囲気はすでに《緑国》の中にもあった。まずもって両国の兵数が違うのだ。《青国》の兵数は一万五千を超えていた。その軍勢は三派に別れ、それぞれが王都に向かって突き進んでいる。

一方で《緑国》は、さんざんかき集めても一万三千しか兵の数が揃わないのだった。またその内の半分は、総反攻のため王都周辺に集められている。つまり残りは六千あまり。そして、それを敵の侵攻に合わせて三つに分けなければいけない。単純計算で、敵の約半分にも満たない兵数で《緑国》は戦わねばならないのだ。敗戦を重ねるのも無理はない。

しかしだからと言って、《緑国》は各地の抵抗を諦めるわけにもいかなかった。《青国》が攻め落とす集落で略奪を行なっていることが分かったからだ。生き残った者の話によると、集落はどこまでも暴虐な振る舞いが行なわれているという。

そのような蛮行をただ手をこまねいて見ていることなどできるはずがなかった。少しでも住民が逃げる時間を稼ごうと、《緑国》の軍隊はじりじりと撤退するような悪戦を続けていた。

背後から、ばたばたと走る足音が聞こえてくる。ひどく慌ただしい様子であった。おそらく伝令だろう。

「副隊長殿！ ジノ副隊長殿！」

伝令はどうやら俺を探しているらしかった。一度小さくため息をつく。それから後ろを振り向いて、俺は手を挙げた。それで彼も気付いたようだった。息を切らせながら走ってこちらに近づいてくる。

「副隊長殿、隊長殿が呼びです」

「すぐに向かう」

俺は伝令に頷くと、直近の部下であるマキシムを呼んだ。

「すまないが、ここを頼む。隊長殿が呼んでいるらしい」

「わかりました。何かあればすぐ知らせるようにします」

俺はもう一度頼むと言って、少し離れたところにある歩兵隊の主力の元へと小走りで向かった。また何かあちらで問題が起きたのだろうか。できればこれ以上の面倒は勘弁してほしい。俺は神にも祈

るような気持ちで隊長のもとへと向かっていた。

《緑国》第二軍、第二歩兵隊の第三副隊長。それが俺の今の役職だった。具体的には、五十人程度の兵をまとめる役目。第二歩兵隊の総数は約四百であり、それを八つに分けた分隊、その内の一つを俺は預っていた。そして正直に言えばこの役職は、俺の手に余っている。

もともと、俺はそこら辺にいるただの一兵卒に過ぎなかったのだ。きちんとした将校の教育も受けていない。人に指図するなど到底俺には向いていないように思われた。そんな俺がこのような立場になったのは、やはりこの戦争が起きたからであった。

二週間前、突如として《青国》は《緑国》に攻め込んできた。いやもしかしたら宣戦布告の宣言はされていたのかもしれないが、俺たち下っ端は知らなかったのだからあまり意味はない。そして国境付近の防衛勢力として存在していた俺たち第二軍は、一番最初に《青国》の軍勢と対峙した。

結果はもちろん知つての通り、こちらの惨敗である。たった一度のぶつかり合いで俺たち第二軍はさんざんに打ち破られた。

もともと第二軍は総勢三千人程度の兵数があったのだが、その戦いのあと、兵の数は二千五百を切るまでに減少していた。一度の戦闘で消耗する兵の数は五十に満たないというのが通説であるので、この戦いでは実に通常の十倍ほどの損害を受けたことになる。そして《青国》の損害はほぼ皆無と言っていいそうだ。よほど兵の力量に差があるようだと思つた。

俺の所属している第二軍・第二歩兵隊は不幸なことにその最前線に陣取っていたため、ほかよりも大きな被害を受けていた。俺が所属する隊を率いていた副隊長は戦死。またその後を継ぐべき副官もひどい怪我を負っており、前線に立って指揮を取れる状況ではなかった。そこでお鉢が回ってきたのが俺である。

俺は撤退時、自分が死なないうよう必死に戦っていたけど、その姿が偶然歩兵隊の隊長の目に止まったらしかった。第二歩兵隊を再編成する際、隊長の鶴の一声で俺の副隊長就任は決まった。もちろん教育も受けていない俺をその役目につかせることに反対意見はあったのだが、隊長は無理やり押し切った。ほかに適正のある人物がいないという消極的な理由がその根拠であった。そのような状況であったため、俺が断ることなどできるはずもなく、嫌々ながら俺は副隊長の役目を引き受けた。

よく知らない者が見れば、隊長は俺を出世させた恩人というように映るらしい。そして実際、その当人が俺に恩を着せていた。お前を引き上げてやったのは俺だぞ、という思いが彼の言動の端々に感じられるのだ。ただ、こちらとしては出世など願ひ下げなことなのである。

さつきも言ったように俺は人に指図することなど向いていないのだ。誰かの指示に従う時こそ、自分の力を最大限発揮できるように思う。さらには人間関係の問題もあった。ついさつきまで立場の同じだった同僚が、突然自分の上司になったらどう思うか。それこそ嫉妬されるくらいならまだいい。問題は足を引っ張る奴が出てくるということなのだ。人間はそれほど綺麗な部分だけではできていない。

事実として、俺が副隊長に就任してから接してくる態度を明らか

に悪い方に変えた奴が何人かいた。すなわち、内心不満に思っている奴はもつといることだろう。まったく、全てが面倒であった。今現在、いくらか信頼できるのは昔から俺と仲のよかった後輩のマキシムくらいだ。

隊長は接収した比較的大きな民家の中に本部を置いていた。小屋の中に入ると、すでに俺以外の副隊長は椅子に座っている。どうやら俺が一番最後に到着したようだ。俺はいかにも急いで来たというふうな装い、用意されていた椅子に座った。それを確認して、隊長は声をあげる。

「全員揃ったようだな」

その言葉に皆の視線が一斉に隊長へと注がれた。

「集まってもらったのはほかでもない。ちょうど今さっき、斥候から新しい情報が入った。どうやら敵はここから二日の位置にいるようだ」

そう言って隊長は一度言葉を切った。

「このままの進軍速度だと、彼らは五日後にまた新しい集落を略奪することになる。そして今度の集落は、なんとも残念なことに、ある程度の規模があるようだ。人口は一万人に近い。そして後方からの報告では、住民が安全な場所に退避するまであと一週間はかかるそうだ。……つまり、俺たちはどうにかしてあと二日、時間稼ぎをしないといけない」

その隊長の言葉にどこからともなく呻きが漏れた。いやもしかし

たら、俺が呻きを漏らしていたのかもしれなかった。また面倒な事態になったものだ。

「もちろんその集落を見捨てるつもりであれば、こちらも無理に敵軍と戦う必要もない。しかしだ。それに納得する者はいないだろう？ そうだ。俺たちが守るべきものは国の民以外にはないはずだ。違うか？」

誰もその質問には答えなかった。隊長はそれを無言の肯定と捉えたらしい。彼は少しばかり感情的になっていた。

「俺達の持つ力でどうにか敵軍の足止めをしないとイケない。これは避けられないことなのだ。……うん。我が軍の置かれた状況は以上だ。それでは今からこの状況に対応するための行動について、私の構想を述べる。説明は副官に任せる」

隊長がそう言うと、横に控えていた隊長の副官が立ち上がった。

「本構想の目的は、後方にある集落の住民の退避を援護することにある。そのため、必要最大限の期間我々は敵軍に攻撃を加え、その足止めを図る。また同時に、こちらの損害を最低限に抑えるための手段を講じる」

その一言で、副官がこれから何を言おうとしているのか俺には分かった。これから一週間、俺たちは敵軍に対して奇襲をし続けるということらしい。またいつ眠ればいいのか分からない生活がやってくるようだ。

俺は誰にも気付かれないうつ小さく、またため息を付いた。

一話（後書き）

拙い小説ですがよろしくお願ひします。目標は、某守護者のような格好の良い文章です。

一話

戻ってきたジノ副隊長の表情はあまりよくなかった。どうやら隊長にまたるくでもないことを頼まれたらしい。副隊長があんな顔をするときは、いつもその後が面倒なことが控えているのだ。俺は嫌な予感がしつつも、副隊長のもとへと近付いて行った。

「こちらは何も変わったことはありません」

「わかった。マキシム、ご苦労だった」

俺が報告を終えると、副隊長は懐から地図を取り出して広げた。それはいくらか土にまみれており、ちらほら破れも見える。よく使いつまれているのも当然だった。その地図の至る所には書き込みがなされていた。副隊長はその内の、ある一箇所を俺に指し示した。今いる位置からは四時間分ほど離れた山の麓辺りである。

「今からここに向かう。すぐに部隊の手筈を整えてくれ」

俺は頷き、尋ねた。

「伏兵ですか？」

「そうだ。俺たちは奇襲部隊の一番手に組み込まれた。なんと
も名誉なことに」

付け加えた部分に関しては、少しだけ感情がこもっていた。俺は副隊長が何を考えているかわかった気がして、少し表情を崩した。

「副隊長殿はひどく信頼されてますからね」

この言葉で意図が伝わるだろうか？　すると副隊長は真面目くさった顔で答えた。

「俺を引き上げたのは隊長殿だからな。気軽に動かせる駒だとも思ってるんだろう。全くもって、面倒なことだ」

副隊長はわざとらしく、大きく息を吐いた。俺の意図は通じたようだった。

「いやまあ、なんとも、副隊長はついてないですね」

「うん。確かについてないな。俺も、それに巻き込まれたお前も」

さらに俺がふざけると、副隊長は薄く笑ってそう返した。それはどこか、諦めの混じったものであった。それから彼は一瞬だけ口を歪め、俺の気を引き締めるように言った。

「余計な話はこれくらいにしよう。敵軍はここから二日の位置にいる。ぶつかるのは明日の夜だ。一度目の奇襲でどれくらい相手のやる気を削ぐことができるか、やれるだけやってみよう」

俺はその言葉に頷き、部隊の手筈を整えるため副隊長の前から離れた。

二週間前、俺は命を落とす寸前のところを副隊長に助けられた。あの国境近くからの撤退戦でのことだ。

すでに戦場の混乱は極まっており、《みどり緑国》の兵士は持っている

武器を放り出して、ただひたすら逃げるような状態であった。第二歩兵隊で言えば、副隊長がその時すでに戦死していたということもある。代わりに指揮をとれる者がその場にいなかったのだ。当然敵軍の追撃に対しても、ささいな抵抗すらできない。こちらの損害はますます増えていった。むしろあの時の戦いの損害は、その半分が追撃戦でやられたのではないかという感覚すらあった。

その時の俺は、まだ武器を手放すところまでは落ちぶれていなかった。しかしやはり周囲の慌しい様子にうまく頭は働かない。

ただ逃げまどうだけでは死ぬ。そんな意識だけはあったのだが、行動に移せていなかった。俺は皆と同じく後方へとただ走っていただけだ。そして俺たちのすぐ寸前まで敵の追撃部隊は迫っていた。

そんな時、大きな声を上げたのが先輩（当時俺は副隊長のことをただ先輩と呼んでいた）であった。

「まだ武器を持っている奴は集まれ！」

確かそんなふうな言い方だったと思う。彼はまだ戦う意志のあった者たちをまとめ、伏兵を置くようにして道の端に小さく固まらせた。俺もやはりその一員として加わった。そして、俺たちは調子に乗って突出してきた敵軍の小さな部隊に痛撃を与えてその足を鈍らせ、それからやっと秩序だった撤退を始めることができた。

なぜその時、皆が彼の言葉に従ったのかはわからない。普通に考えれば、当時ほんの一兵卒でしかなかった彼の言葉を信じてもし生き残れるようには思えないはずなのだ。しかし皆は従った。俺もだった。それは単に藁をも掴むような気持ちだったのかもしれない。だがそれで俺たちは生き残ることができた。

だからこそ俺は、先輩が副隊長に任命された時、その副官に立候補した。もともと仲良くさせてもらっていたということもあり、それは問題なく受け入れられた。とりあえず今のところ、この判断が間違っていたとは思っていない。ただなんとなくこの先輩の近くにいれば、この負け戦でも生き残れるんじゃないかという思いがその時の俺の頭にはあった。

俺は部隊が待機していた場所まで移動すると、大声で移動すると告げた。思い思いに休んでいた連中は、それを聞いてのそのそと立ち上がる。その様子はどう見てもまともな部隊とは思えなかった。まあそれも仕方のないことではあるのだが。

命からがら国境での戦から逃げ出してきた、今度は息をつかせぬまま各集落の防衛戦だ。それも時間稼ぎをするだけという、つまりない戦いである。いくら犠牲を出さないような戦い方をしているとはいえ、明るい話題もなく、ただただ少しずつ部隊の仲間が脱落していくのは精神的にきついことだろう。

さらに言えば、この部隊は撤退時の損害が大きかったため周囲の部隊から兵の融通を受けていた。結果として、部隊の三分の一は寄せ集めの兵士であり、統制だった連携などほとんどとれない。

それに周囲の部隊だって、使える兵は自分の隊に残しておきたいのだ。もちろん各自が生き残るために。そのため、融通される兵自体の練度はさほど高くない。

ましてこの部隊の副隊長はついこの前昇進したばかりの、きちんとした教育も受けていない人物なのだ。あの時の撤退戦の場にいた

者は違うだろうが（もちろんその中にもいまだ副隊長の力量を疑っているものもいるが）、それほど体格も良くない副隊長のことを見くびっている兵は多かった。

ないないずくしのこんな部隊で思うような戦いなどできるはずがない、という思いはもちろん俺にもある。しかし現実是非常であった。この部隊でどうにかこの先をやりくりするしかない。せめてものこと、俺は副官としていくらか迫力を出すことにした。

「お前ら、急げ！ はやくしろ！ 半時間後にはここを出発するぞ！」

必死で張り上げた俺の声も、彼らの反応を早くするにはまだ足りないようであった。

《青国》アヲクニ 第三軍・第五歩兵隊第四分隊。それが俺の所属している部隊だった。今現在、俺たち第三軍は《緑国》の王都に向かってひたすら行軍している。軍の士気は異常なほどに高い。無理もないことであった。予定では五日後、また新しい集落に攻めこむことが決められていた。俺らはまるで、目の前に餌をぶら下げられた馬たちのようにであった。

今度の集落はかなり大規模なものという話である。人口は一万を超えているそうだ。であれば、攻め込んだ際の抵抗もそれなりのものであるだろう。しかし、こちらの兵数を考えればどんな抵抗もただの時間稼ぎにしか過ぎないのだった。特に問題はない。

むしろ大事なのは攻め落としその後である。今度の集落は、これまで落としてきた集落以上に大きな旨みがあるはずだ。できれば先陣を切って集落に攻め入りたいところだな、と俺は思っていた。

ついこの前落とした集落は規模が小さいものだったので、最初の方に入った部隊がその美味しいところを全て持ち去ってしまった。俺らの順番が回ってきた頃には集落の中には金目の物などほとんどなく、もちろん女などはその姿形すらない。その集落にはただただ燃えた建物と、遺体だけが残されていた。そんな状況に俺以外の部隊の兵たちも、かなり不満が高まっているはずだった。

「なあおい」

あることを思いついた俺は、すぐ隣を歩いている同僚のリットに声をかけた。こいつも確かこの前のことに不満を言っていたはずだ。

「ん？ どうした」

「この前の集落、ひどかったよな」

それでそいつも、俺が何を話したかわかったようだった。

「しけたもんだったな。女一人残っちゃいねえ。金になるもんがないかと焼け残った家に入ってはみたんだが、本当になんにもなかったな。畑の作物も全部抜かれてたし。ああ、備蓄してた麦の残ったやつは見つけたんだ。ただそれも食料班に取り上げられちゃった」

命を張ってんだからせめてものご褒美くらいは欲しいよな、とり

リットは言った。俺は少し声を小さくして、その後を引きとった。

「だからよ、今度は俺達もちゃんとした汁を吸いたいと思わねえか？」

俺が考えていることにリットは興味を持ったようだった。

「どういうことだ？」

「だからな、集落は攻め込んだ時の順番に略奪ができるだろう？」

リットが頷く。

「だが、俺たち第五歩兵隊はいつも攻めこむのが遅い。だから周囲に美味しいところ持ってかれてるんだ」

「ん？ 確か、俺たちはもしもの時のために退路を確保しているんじゃないかったか？ 俺はそう聞いたぞ」

「いや、それもな。どこにその“もしも”の場合があるっていうんだよ。実際、今まで周囲の連中が暴れてるのを俺たちは物欲しそうにただ見てただけじゃねえか」

そう言うと、リットは少し考えるような表情になった。

「だからな。今度は俺たちも先陣に加わるんだ」

俺は続ける。

「独断で俺たちが突っ込むんだよ。ある程度揃った数で行けば、多分周囲の奴らもついてくる。いい加減不満が溜まっている奴は多いだろうしな。ぐちゃぐちゃになっちまえば誰が誰だかわかんねえし、どうせ勝ってる戦なんだ。処罰を受けることもないだろうさ」

俺がにやりと笑うと、リットは少し迷ったようだった。しかし、最後は俺につられるように笑った。とりあえずこれで賛同者が一人だ。さらに数を増やさないといけない。

俺はリットから離れ、また別に賛同してくれそうな同僚を探した。

二話（後書き）

で視点が変わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3179y/>

ジノの彩国建国物語

2011年11月17日14時16分発行